

# 『文句要伝』 解題

大平 宏 龍

この度、平島盛龍所員によって、日隆聖人の制作による『文句要伝』が翻印されることとなった。この為に株橋祐史副所長と平島盛龍所員は、大本山本能寺様の御厚意により、初めて詳細な調査を行った。成果は、本誌所載の報告書を御覧頂きたい。この『文句要伝』は、従来、写本は伝えられているが、活字とされるのは初めてであり、隆師研究の上で喜ばしい。

管見では『文句要伝』は本誌第二三号所載の『玄文止諸御抄出処』と共に考察すべきものであり、隆師の教学研究の方法を自から実施された所産と思われる。

すなわち『文句要伝』は隆師の著作ではなく、内容からはメモ・覚え書きの類とみられるのである。この点で『玄文止諸御抄出処』と同様な内容であるが、『出処』の筆跡が老年であるのに対して、『要伝』の方は『弘経抄』よりも前かとみられる故に、『出処』は『三大部略大意抄』の、『要伝』は『弘経抄』の、それぞれの述作のために用意されたものではないかと推測される所である。

『文句要伝』の名称は隆師の自撰ではなく、隆師自身は内題に「文句下」（文句のしも）と記してあるように、天台智顛述『法華文句』の順序を追いながら、関係する宗祖の遺文名と所述の法門あるいはその要文又は取意の文を記されたものである。

ちなみに浅井圓道撰『法華品類日蓮遺文抄』は、当初『縮刷日蓮聖人御遺文』に拠って、日蓮遺文に引用され

た法華經の文章を、法華經の内容の順に整理したものであり、『文句要伝』とは目的が同じようでありながら、成立環境も編集方針も違いがある。隆師の場合は、日蓮遺文の輯集が困難な状況の中で、「御書を能眼・能照とする」方法を貫く為に、このような述作が為されたのであることを注意したい。

以下、注意される点を簡条書とする。

- ① 通称 文句要伝。但し外題の『文句要伝』は他筆。
- ② 内題 文句下（文句のしも）隆師真蹟。
- ③ 異称 なし
- ④ 巻数 一卷
- ⑤ 著者 慶林房日隆（一三八五～一四六四）
- ⑥ 著作年 不明。恐らく、『弘経抄』以前か。
- ⑦ 真蹟存否 真蹟存。紙背文書なし。
- ⑧ 法量 紙数全七九紙  
全体縦二七・六×横八二〇糧（今回調査による）  
本紙縦二七・六×横七九四・二糧
- ⑨ 形態 卷子本
- ⑩ 所蔵 大本山本能寺
- ⑪ 自著の引用 なし
- ⑫ 目録 藤井学・安国良一編『本能寺文書・什宝等目録』（本能寺、昭和六二年（一九八七年）一二頁。

⑬写本 安政四年（一八五七年）所写本、両備八品講所蔵。

⑭刊本 従来なし

⑮内容 天台大師の『法華文句』十巻について、順次その内容と関連する内容をもつ宗祖御遺文を列挙し、ある場合には御遺文中の一節を抄録・取意等して記するもの。即ち宗祖御遺文を能眼・能照として『法華文句』の内容を（更には法華経を）解釈しようとするもので、恐らく『本門弘経抄』の述作の準備に撰集されたものではないかと考えられる。隆師の教学方法論を自ら実施した所産とみられ、隆師研究において貴重な資料である。

⑯参考文献 大平宏龍稿「『文句要伝』『玄文止諸御抄出処』私考」（『興隆学林紀要』第五号、平成三年（一九九一年）三月）。

大平宏龍稿「日隆聖人教学成立の資料——宗祖御遺文について——」（『桂林学叢』第八号、昭和四九年（一九七四年）九月）。

株橋祐史・平島盛龍稿「『文句要伝』調査報告」（『桂林学叢』本号所収）。

⑰備考 浅井圓道撰『法華品類日蓮遺文抄』（山喜房仏書林、昭和六三年（一九八八年））。

付記 今回の翻印に関しては、大本山本能寺御貫首菅原日桑猊下の御快諾のもと、赤田泰宏執事長、築瀬城諒師、佐藤泰慎師、藤井禎圓師の御協力を頂きました。大本山本能寺様の御配慮に甚深の謝意を表する所です。

## 『文句要伝』調査報告書

- ・調査日時 平成二五年一月二五日（火曜日）、午後一時～三時三〇分
- ・場所 大本山本能寺大宝殿
- ・調査員 株橋祐史（副所長）、平島盛龍（所員）
- ・本山側立合 赤田泰宏執事長、築瀬城諒上人、佐藤泰慎上人、藤井禎圓上人

①通称 文句要伝。但し外題の『文句要伝』は他筆。

②具名 本文冒頭にある「文句下」の表記が他の文字と比較してかなり強調されたものとなっており、隆師にあつてはこれを内題と考えておられたか。

③異称 なし

④形態 卷子本

⑤巻数 一卷

⑥法量

・全体 縦二七・六×横八二〇（但し『本能寺文書・什宝等目録』には縦二七・六×横八一七・一とする）

・本紙 縦二七・六×横七九四・二

⑦紙数 全七九紙。（但し文字の書かれていない細い継ぎ紙を含む）

⑧一紙あたりの行数 単なる継ぎ紙の如き文字の書き込みのないものから、一行ないし最多で二二行が確認され

る。

⑨ 識語 卷末にあり。

⑩ 紙背文書（文字） 確認されない。

⑪ 状態 「薬王品下」より卷末にかけて虫食いが確認される。

⑫ 自著の引用 なし

以上

※なお、今回の調査によって、複写本では判断不能な紙の継ぎ目、判読不能な文字等を解読することができた。  
このたびの調査に関し、大本山本能寺様の御配慮に甚深の謝意を表する次第です。